

経営アナリスト研究会主催  
第1回全国研究協議大会実施報告書

標記研究会は、2019年8月29日(木)9:00-17:00、国立オリンピック記念青少年総合センター(106研修室)にて開催された。当日は、茨城県の商業に関する学科で学ぶ高校生のほか教員を合わせて6名が参加したほか、長野県の教員が3名、兵庫県から教員や社会人が2名参加するなど、全国から教員が集って活発に意見交換を行った。

協賛いただいた(株)ユーゴアの沼崎周平社長や稲野辺崇晃氏、税理士法人報徳事務所からは代表社員で本研究会世話人の赤岩茂氏(茨城県立古河第一高等学校商業科卒)ほか6名が参加したほか、赤岩氏と同じく公認会計士で兵庫県立西宮高等学校国際経済科卒の徳光啓子氏(税理士法人タックス・アイズ)にもご参加いただき、会計情報を活用した教育実践をどのように展開できるのか、幾つものコメントを頂戴した。

参加者は、上記に加え、茨城大学人文社会科学部の学部生および大学院人文社会科学研究科の大学院生

15名のほか、実教出版株式会社や東京法令株式会社といった、高等学校の商業教科書および副教材を出版、販売する出版会社からの参加もあり、総勢39名になった。

第I部では、大学生(学部生)による会計情報を活用した研究報告があった。ここでは、有価証券報告書の活用や企業経営を議論するために必要な会計情報とは何か、それに、商品回転率といった尺度を用いてキャッシュフローとの相関をみたとき、標榜するビジネスモデルが機能していないのではないかという批判や、新製品開発とそれを取りまくマーケティング活動が、必ずしも優先順位の上位に位置づけられていない可能性が指摘された。こうした研究の豊富化によって、会計情報のますますの活用が可能になるほか、企業活動やビジネスモデルが機能するとはどういったことなのかについて、議論を深めることができた。

第II部では、エイベックス・エンタテインメントにご所属の畠山開氏にご講演を賜った。主に大学生のキャリアに向けた内容であったが、畠山氏の半生とキャリアを考えるうえでの軸や夢について、議論が及んだ。こうしたキャリアの考え方は、高校生の進路指導にも活かされることが想定され、高等学校の現場にも応用できる期待が高まったほか、あらためてマーケティングと企業活動とが一体として機能することの重要性に向けた示唆も含まれていた。

その後、常陸大宮高等学校の横山先生、神戸商業高等学校の清水先生による教育実践の報告が行われた。横山先生は実務への接続が模擬株式会社の推進によって可能になることが示されたほか、清水先生は教員が苦手とするサービス企業の経営分析について、さまざまな方法が示された。いずれも、通常の商業教育では見落としがちな視点が含まれており、さまざまな挑戦が可能になることが確認できたほか、一番重要なのは、こうした教育を推進することの難しさとそれを克服する視点をどのように理解することができるのかである。教育実践の報告からさまざまな理解が可能になり、まさに研究

経営アナリスト研究会主催  
**第1回全国研究協議大会のご案内**  
後援：茨城県教育委員会、茨城県高等学校教育研究会、茨城県高等学校教育研究会商業部、茨城大学人文社会科学部、税理士法人報徳事務所、(株)ユーゴー  
協賛：税理士法人報徳事務所、(株)ユーゴー

本研究会は、企業活動がどのような社会の仕組みの中で機能し、それがどのような会計情報に反映されているのかを捉えながら、そこにどのような特徴や問題が示されているのかを解釈的に検討します。未来の経営アナリスト育成を目標しながら、一方で会計情報と非会計情報の適切な接続を模索し、もう一方で、望ましい企業活動とはどのようなものなのかを議論する場として、さまざまなビジネスの可能性を模索する意義を持ちます。この意義を感じ、活かしていく場を生み出すべく、第1回の全国研究協議大会を開催いたします。


**日時** 2019年8月29日(木) 9:00-20:00  
**場所** 国立オリンピック記念青少年総合センター 106研修室  
〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1

**第I部 家具・インテリア各社の経営分析**(9:10~10:05)  
白澤涼(茨城大学マーケティング論ゼミナール)  
**文具各社の経営分析**(10:10~11:05)  
西條初菜(茨城大学マーケティング論ゼミナール)  
**コメント**(11:05~11:45)  
徳光啓子(税理士法人タックス・アイズ、公認会計士)

**第II部 講演「これからのキャリア・働き方、企業」**(仮)(13:00~14:30)  
畠山開(エイベックス・エンタテインメント㈱/こだわり.com代表)  
**日本初6次産業型高校生株式会社による新事業**(14:30~15:25)  
—金融商品による資産運用と企業の財務諸表分析—  
横山治輝(茨城県立常陸大宮高等学校 教諭)  
**生徒の研究「ディズニーランドの魅力」をもとに**(15:30~16:25)  
清水秀樹(兵庫県立神戸商業高等学校 教諭)  
**コメント**(16:30~17:00)  
赤岩茂(税理士法人報徳事務所、公認会計士) 沼崎周平(株)ユーゴー代表取締役)

**第III部 懇親会**(18:00~20:00、レストランとき(カルチャー棟2階))

メモ



協議の場として、この大会を位置づけることができた。



先生方から感想を伺いますと、ひごろの授業（例：検定試験のための授業展開）では気づくことのできない視点を数多く知ることができたという声が圧倒的に多かった。また、会計情報を活用した授業展開を進めている教員からは、その方法や授業展開のプロセスについての質問が寄せられたほか、教員間の活発な意見交換も行われた。

畠山氏の講演についても反響が大きかった。さっそく自県や自校での講演を依頼する教員もいた。それくらい、畠山氏の講演内容は聴き手に大きなインパクトがあったといえる。キャリアという視点で人生を展望すること、また、その中で生きること、働くことを位置づけること、そしてそのために必要な知識や技能をどのように身につけて活かしていくのかということ、一体的に考える必要性が示されたことは有意義であり、これを大学生だけでなく高校生から教育の現場でともに考える機会が大切であることが確認された。

さいごに、研究会を主催する代表者としては、それぞれの教育や研究の実践が、井の中の蛙に留まらない、あるいは発展させる余地を持った有意義な活動であることを共有できる場が機能し始めたことに、大いなる喜びと参加した皆様への感謝の気持ちが湧いてくる。一方で、一過性のものに終わらせるのではなく、活動を継続させることで教育や研究の充実を促し、ますますビジネスの教育や研究が充実することを期待する。

研究会を終えて気になったのは、さまざまな気づきに基づく活発な議論の重要性である。ビジネスの成果といっても、さまざまな解釈が成立する。このとき、より多くの解釈に気づくことが重要なほか、より妥当な解釈に基づく未来への探求が求められる。しかしそれを、必ずしも教員が事前に想定できるとはいえない。つまり、さまざまな議論を通じて妥当性を高める努力が必要であり、ここに研究会が果たす役割を示すことができる。こう考えると、気づきに基づく活発な議論が可能な雰囲気づくりとはどのように実現できるのかが大切である。今回は、私のような研究者、実績豊富な会計士を招くことでさまざま議論が可能になったが、それだけではないはずである。他者の意見を受け入れ、多様な議論からより優れた思考とは何かを論じていくことができるに違いない。結論を急ぐのではな

く、必要な議論は継続させ、幅広い視点から妥当性をめぐって理解を深めていく。こうした努力を参加者全員が推進していくことで、大いなる知見の獲得に到達するに違いない。会計情報の活用も、こうして技法が生成されていく必要があるほか、それが非会計情報の何と結びついてどのような議論を生むのか、こうした考え方をさまざま提起していく場として、この研究会を位置づけていきたいと考えている。こうした考えを確信することのできる研究会になった。

末筆ながら、本研究会の活動にご理解を賜った関係の皆さまに厚く御礼申し上げますとともに、引き続きのご理解とご協力を賜りますよう、よろしく願いいたします。

文責：今村一真（茨城大学人文社会科学部 教授，経営アナリスト研究会代表）